

第10回優秀論文賞選考理由

選考委員会委員長・滝口太郎

現代中国政治において、政治体制改革と共産党のガバナンスの相関関係は、きわめて重要なテーマになっている。とくに地方の人民代表大会選挙は、共産党のコントロールの下で国民の政治参加を進める実験的な役割を果たしているといえよう。しかし従来の人民代表大会選挙に関する研究は、共産党にとって有効な選挙制度の構築方法、運営方法などに関する研究や、その反対側の視点から民主化の萌芽として単純に評価する研究が中心であった。それに対して本論文は、2003年の北京市区人代直接選挙における「自薦候補」を取り上げ、選挙民・候補者による利益表出の意義と、それに対する共産党のコントロールを立体的に分析したユニークで優れた研究である。また同時に多くの選考委員から、専門外のものにもわかりやすく整理された記述であるとの評価も得た。

分析の資料としては、数多くの中国語文献を使用し、また選挙関係者へのインタビューも多用していることが特徴である。本論文によって明らかにされたものは、以下の諸点であろう。1)北京市における地方人代選挙の組織、実施手続き、また実施過程における党のコントロール方法を解明したこと、2)「自薦候補」の多くは政治参加自体を目的としたが、選挙民は彼らを利益代表としてとらえており、この状況によって「自薦候補」が将来利益代表になっていく可能性を指摘したこと、3)党は「自薦候補」を認めながらも、その活動を党の許容範囲内にコントロールしているが、その範囲は場合によっては柔軟であり、変化し得ることを指摘したことである。

中国政治における共産党のガバナンスは、市民意識の変化によって複雑な対応を迫られている。本研究は、北京市における地方人代選挙の分析を嚆矢として、現代の中国共産党が如何にして統治の正当性を確保していくかとの大きなテーマに発展していく可能性を含んだものである。

受賞の言葉

常磐大学 中岡 まり

この度、アジア政経学会優秀論文賞を受賞させていただくことになり、身に余る光栄と感激しております。

今回の受賞論文を含めて、私はこれまで中国共産党と直接選挙のかかわりについて研究を進めてまいりました。一党独裁ができていながらもかかわらず、なぜ選挙制度が必要なのか、無くてもいいのではないかと、とのご質問をいただくこともあります。しかし、建国直後から共産党にとっては、選挙は党の支配の正当性を法的に獲得し、政権を確立するために不可欠なものでした。その後、90年代に入り、共産党は選挙制度の再建を図り、選挙民資格・選挙区割り・候補者推薦・候補者決定などの段階において党の指導を強化し、党が相応しいと考える候補者が選挙制度を通過して当選し、党が計画した代表構成を維持する選挙制度を作り上げていきます。しかし、現在、選挙制度とその管理工作が精密化する一方で、選挙によって得られる党の支配の正当性の規模は縮小しつつあります。同時に、共産党が選挙の中心的な機能として設定していない利益表出・利益集約を、選挙によって果たそうとする人々も現れています。制度や法は一度作り上げると、設計者の意図しなかった使われ方をすることがあります。中国共産党の作り上げた選挙制度にも同様のことが起こり始めているのでは、と私は考えております。具体的な事例を積み上げながら、こうした中国共産党と選挙制度の関係の変化を綺麗に描き出し、共産党の支配の在り方の変化を明らかにすることが今後の自分の研究課題であると考えております。

最後になりましたが、これまでお導き下さった先生方にお礼を述べさせていただきたいと思っております。山田辰雄先生には指導教授としてものの考え方、見方など基礎の基礎から教えていただきました。国分良成先生、高橋伸夫先生には慶應でのプロジェクトにおいて勉強の機会を与えていただきました。また、今、いらっしゃいませんが、小島朋之先生には人大選挙研究で有名な袁達毅先生と知り合う機会を与えていただきました。慶應の中国研究の末席に連らせていただくきっかけを作ってくださったのは西村成雄先生です。中兼和津次先生、高原明生先生、菱田雅晴先生は研究プロジェクトにおいて多く学ぶ機会を与えてくださいました。いつも叱咤激励してくださる山田ゼミの先輩、家近亮子先生、唐亮先生、松田康博先生にも感謝しております。今回の受賞論文に関しましては、学会報告の際に武田康裕先生より、独立候補に対する党のボトムラインがどこかを描くよう焦点を絞る、というアドバイスをいただいたことが大きな助けとなりました。また、匿名の査読者の先生からの、中国研究者以外が読んでも研究の意義が感じられるように、とアドバイスをいただいたことは、今後の研究にも大変示唆に富むものでした。当時編集委員長を務めていらした大橋英夫先生、今回審査委員長として評価してくださった滝口太郎先生と審査委員の先生方にもお礼を申し上げます。今後、この賞の名に恥じぬよう、研究に精進してまいる所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いたします。